

～映像と斜陽

statement 1

映像は映ること、視ることに還元されない時間を保持する。映画最初期において、駅のホームに汽車が侵入する映像があった。しかしそのプリミティブな映ること、視ることに人は飽き足らず、編集を含む映像表現を発見した。

映像には単一になりうる時間の停止が存在しない。映像表現からステルを生成しても、それは映像の知覚と全く関係のない単なる図像に変わってしまう。身も蓋もなく捉えれば映像とは前後を伴う流れである(小川からすくった水を人に見せてそれがいかに小川であるか語れるか。すくわれた水は小川であったことを忘れていて、小川は水を知らない)。映像のもつ映ることにも、視ることに還元されない時間とは、それが意味(＝ナラティブ)を問う時間のことである。そこでは小川のあり様についていくつかの抵抗(目の前に投影されるカットが小川をながれているのか、そこにどのようなナラティブを得るのか)があつてしかるべきだ。映像はこうした判断を私たちにあおり続ける。

ひと度あおられ、私たちは判断をする。これは小川か？と問うとき、その小川があり様を形作っていく過程を私たちはフィクションとして与えられる。それは経験された経路が平板に畳み込まれた効果としての景色である。効果は時間を持たない。そのためそこには私たちが選び取り、判断するような関係性は望めない。もし望めるとすれば、それはその外で、あるいはその後でのことであり、その判断にはまた別のフィクションが与えられる。

ここでありうる取り組みのひとつは、後者を前者へと送り返すこと、つまりフィクションにたたみ込まれた経路を映像表現として時間に翻訳することだ。そうすることで私たちはフィクションが停滞することを防ぎ、一方向的な時間に抗する。おそらくここには当面の意義を見出すことができる。しかし問題は、映像のそれも例外ではなく、経路とは常に無防備なものであるということである。フィクションを映像に翻訳しようとすれば、映像のたどる経路もまた畳み込まれ、フィクションへと変わる。

こうして、映像は映ること、視ること、判断することに還元されない時間を与える。私たちは判断しようとせずとも、映像から経路を与られている。ここでは判断の必然性はフィクションそのものと区別できない。いわば発生的な時間をここに認める。自明のことながら映像表現においては、それは与えられると同時に判断される。何が先か峻別はできないし、連鎖関係のきっかけを認めることは重要ではない。発生的な時間は意義に回収できるもののみを残さず、むしろ意義に回収できないフィクションとして立ち現れる。映ること、視ることをつなぎ合わせ、判断することを課してしまった私たちはフィクションの経路の一部を映像に奪われてしまった。今や私たちはホームへと侵入する汽車を怖がることはできない。